

松 山 大 学 論 集
第24巻第4 - 2号抜刷
2012年10月発行

幕府貨幣改鑄と藩・地域

—— 三河国田原藩の新金引替を事例として ——

勝 亦 貴 之

幕府貨幣改鑄と藩・地域

—— 三河国田原藩の新金引替を事例として ——

勝 亦 貴 之

は じ め に

近世貨幣史については豊富な研究の蓄積がある。近年では、特に貨幣流通に関する研究が深化し、その結果、従来の「東は金遣い、西は銀遣い」という言葉に象徴される図式的な理解では把握できない、貨幣流通の多様性や地域性が明らかにされてきた¹⁾。

しかしながら、その中心は御為替両組や両替商による新貨の引替や、地域における貨幣流通の実態を明らかにするものであり、岩橋勝氏が、「幕府による貨幣改鑄の際、あたらしい金貨・銀貨がどのように地方に普及していったか、というような具体的な流通を明らかにする研究もほとんどなされていない」と述べているように²⁾、伊東多三郎氏や山口和雄氏の問題提起があるのにもかかわらず³⁾、貨幣改鑄時に新貨がどのように引き替えられ浸透していったのかという視点からの研究は、東北地方を対象にした渡辺信夫氏や国安寛氏の研究以外行われていないのが現状である⁴⁾。つまり、従来の貨幣流通史研究には、幕府の貨幣改鑄を受けた藩・地域における新貨使用の実態から、幕府の新貨引替策の問題点を明らかにするという視角が欠如する傾向にあったのである。

また、従来の研究の対象は、東北地方や近畿地方以西が中心であり、東海地方や関東地方を対象にした研究はほとんどなかった⁵⁾。

以上の問題関心をもとに、本稿では、元禄～元文期に実施された数度の貨幣改鑄時における三河国田原藩の新金引替の実態を明らかにすることから、幕府

による新貨引替策の構造的問題について検討したい。

1 貨幣改鑄の開始と田原藩

(1) 元禄期の貨幣政策への対応

田原藩は渥美半島に位置した譜代小藩である。慶長6年(1601)に戸田尊次が1万石で入封した後、寛文4年(1664)5月には三宅康勝が三河国衣(挙母)から1万2,000石で入封し、以来明治4年(1871)の廃藩まで三宅氏が領した⁶⁾。領内の支配機構は、国元家老(年寄)の下に郡(村)奉行が置かれ、その下に地方と山浜の両代官が配されていたが、両代官は領内郷村を東手永(神戸村・浜田村・久美原村・長仙寺村・院内村・根田村・野田村・田原町の7か村1町)と、西手永(和地村・越戸村・若見村・赤羽根村・高松村・大草村・大久保村・芦村・宇津江村・仁崎村・白谷村・方浜村・波瀬村・浦村・吉胡村・加治村の16か村)に分け支配した⁷⁾。

幕府は、元禄8年(1695)4月、これまで通用していた慶長金銀を低品位の金銀に吹き替える元禄改鑄を実施し⁸⁾、9月から新古金銀の引替を開始したが⁹⁾、藩でもそれに対応することになった¹⁰⁾。

一同^(11月)二十四日、当町庄屋・年寄共招寄申渡候趣、今度新金銀吹直被仰付候、古金銀と同事ニ入取引仕候、田舎之事ニて候故、新金出申候達江戸より取りよせ候之間、とくと見届候て何方より参候とも新金取引可仕候、町中へ申触候様ニと、庄屋へも申付候
一同日、両代官招候て、新金銀出申候間、古金と同事ニ相心得取引可仕候旨、郷村庄屋共へ被申渡候得と相達候、尤新金銀庄屋方ニ差置候間、庄屋とも参候て見可申之由も申渡候

同年11月24日、藩の郡奉行は田原町の庄屋(名主)・年寄と両代官を呼び寄せ、新金銀吹替の実施と古金銀との無差別通用を命じた幕府の触書の趣旨を

伝達するとともに、前者に対しては、「田舎之事」であるから改鑄の触書を江戸から取り寄せたので、良く読んだ上で他領の者との取引においても新金を使用することと、その旨を町中へ申し触れることを申し付けた。後者に対しては、触書の趣旨を郷村の庄屋達へ申し渡すことと、新金銀を田原町の庄屋方へ差し置くので郷村の庄屋たちへ見に来るよう命じることを指示したのである。

このように、藩では領内への新金の通用に努め、翌年の秋には麦金などの石代金を新金で上納させることを決定したのであるが¹¹⁾、新金の通用は円滑に進まなかった。そこで、郡奉行は、同10年閏2月8日に、町名主・組頭・年寄を呼び寄せている¹²⁾

(閏2月)
一同八日、名主・組頭並年寄共招寄之申渡し候、去十月申渡候通新金爰元
にて罷成候筈ニ候、小判ハ新金大形替申候得とも、小吹は古金いま卓
散ニ相見へ候、所ノ不自由ニ付、新金替申候事成不申候ハ、金集候而
此方へ差出申候様ニ成とも可仕候間、相談極候而可申上候、名主申上候
ハ、金もたくさんニ有之間舗候へとも、^(誰)唯も江戸へ参候者無御座候、
然者、御無心申上候と申段迷惑可存候、六太夫申上候、少計之新金ハ尾
州ニても替可申候間、左様被遊可被下候と申上候付、いかやう共埒明申
様ニ仕尤候、委細は追而可申聞候

郡奉行は、小判はほとんど新金に引き替えたが、小吹（一分金）が多数通用している状況は「所ノ不自由」となるので、新金と引き替えることができないというのであるならば、古金を集めて当方へ差し出すようにしてでも引き替えるべきであるから、相談し決めるようにと申し付けた。それに対し町名主は、金自体もたくさんあるわけではないが、江戸へ行く者が誰もいないので迷惑であると答えた。しかし、六太夫が少しの新金なら尾張で引き替えてくると答えたので¹³⁾、どのような手段でも埒が明くようにすることはもっともであり、詳細は追って申し聞かすとしたのである。

そして、郡奉行は、13日にも再び町名主・年寄を呼び寄せている¹⁴⁾

一同^(閏2月)十三日、当町名主・年寄とも呼よせ申候、此頃も申渡候新金の訳ハ如何仕候哉と承候処、わつか計御座候を金子之儀候得ハ、御無心不被申上候、両判之儀ハ新金ニ替へ申候、小吹之儀は御座候得とも、人ニ詮儀仕候得ハ、貳分・三分・壹両・貳両・三両ほとつゝなしてハ持不申候、あきなひ物買申候時節外へ替遣候得ハ^(ママ)かけ申候、手前二もち不申候ハハ不相成候、かへ申候而新金小吹ニ可仕候間、御苦身ニハ仕間舗候、其段被仰上可被下候

郡奉行が彼らに対し、新金通用の件についてその後の様子を聞いた。それに対し町名主・年寄は、金はずかしか所持していないので無心できないとし、小判は新金に引き替えたが、一分金については詮議したところまとまって所持している者はおらず、商売の際に領外へ引き替えに遣わせば引き替えられるが、手元になければできない。新一分金に引き替えるので、心配は無用であると答えたのである。

一方、郡奉行からの指示を受けた両代官も、同10年閏2月8日に郷村の庄屋に対し幕府の新古金銀の引替に関する「書付」「口上覚」「金銀引替之覚」を示すとともに、次の申し渡しを行っている¹⁵⁾

一同日、郷村の庄屋壹人ツ、呼候而、両代官中申渡候、去之秋申渡候、其節申候ハ、時分二も成候間、右代金・^(石カ)麦金など上ケ申者共可有之候、其刻は新金上納可仕候、左様心得金子なども持候ものハ、町へ参替可申候、其内遠も候ハゝ、此方へ可申聞候

両代官は、石代金を新金で上納すべきであるという昨年の秋の申し渡しを再確認するとともに、古金を所持する者は田原町で引き替え、遠方の者は両代官

へ申告するようにと指示したのである。

藩が新金の通用に苦心しているなかの同10年4月に、幕府は翌年4月からの古金銀の通用停止を命じた¹⁶⁾。藩でも町・郷村へその旨を伝えているが¹⁷⁾、古金銀は停止以後も依然として世間で通用していたようで、幕府は元禄15年2月に、「古金銀吹直シ有之候処、今以所々ニ有之由」と古金銀の引替を促し¹⁸⁾、宝永3年(1706)正月には、「今以世間ニ古金銀相残候」と、再び古金銀の引替を督促するとともに、新古金銀の取交通用を認めることになったのである¹⁹⁾。

こうして新古金銀の引替は遅々として進まなかったのであるが、元禄改鑄はいくつかの問題を引き起こすことになった。

まず、銭相場の問題があげられる。この点については、次の事例からうかがうことができる²⁰⁾。

(正月)
一同四日、庄屋金七郎呼候而申渡候ハ、旧冬錢之相場申付候、御家中之者共へ者壹分ニ付九百三拾六文之通売可申候へとも、郷村之者共へハ右之直段にて売不申候事も知申間鋪候間、郷村之者も如此之直段ニ売可申之旨町中へ相触可申候、脇より若高く売申よし聞へ候ハ、越度たるへきの段申付候

元禄14年正月4日、田原町庄屋金七郎を呼び旧冬の銭相場を申し付けた²¹⁾。その際に町から郷村へ売る時の銭相場が問題となった。藩の家臣に対しては金1分に930文の相場であるが、郷村に対してはその相場で売っていないと聞いているので、その相場で売よう町中へ触れるべきことと、もし脇より高く売っている様子を聞いた場合は越度であると申し付けている。改鑄の結果銭相場が高騰したのである。

このような状況に対し、幕府は銭貨の増鑄を行い、宝永5年になると大銭(宝永通寶十文銭)も鑄造しているが、その結果今度は銭相場が下落してしまう²²⁾。

一銭兩替四月二入上り不申、吉田四貫五百文、田原四貫四百文二付、世間見合可然二成、浜方取立四貫五百文ニ相定候

錢相場が4月に入ると上がらず、吉田では金1両に4貫500文、田原では4貫400文であったため、「世間見合可然二成」り、浜方運上の取立相場を4貫500文に定めたのである。

元禄改鑄の結果不良貨幣の問題も発生した²³⁾ 改鑄後の劣位貨幣は、切れ小判や折れ小判などの不良貨幣となりやすかったのであるが、田原藩でも不良貨幣の通用が認められる。藩では、江戸藩邸における諸経費や江戸詰藩士の給金、幕府から賦課された国役金などを、足輕宰領や東海道吉田宿の金飛脚を利用した「町使金」などによって送金していたが、宝永5年4月1日に国役金や藩邸の雑用金、藩士の誂金を正金で送金した計269両3分のうち6両2分が「悪金」であったため為替で遣わされ²⁴⁾ やや次期は降るが正徳5年(1715)4月21日に120両1分を送金した際には、中間組の給金60両のうち1両が「悪金ノ歩」であった²⁵⁾ 事例こそ少ないが、田原藩領においても、「悪金」、すなわち不良貨幣が通用していたことがうかがえよう。

これに対応するため幕府は、宝永7年4月に、「先年新金吹直有之处、金之位悪敷、折損しも出来、通用不自由」であることを理由に、慶長金と同位ながら約半分の重量の宝永金へ吹き替え、同月から通用を開始するとともに、元禄10年に鑄造が開始された二朱金の通用を停止した²⁶⁾ 宝永金は、「乾」の刻印があることから乾字金(乾金)と呼ばれたが、この乾字金の通用が次代の幕政における重要課題となるのである。

(2) 正徳・享保期の良貨政策と乾字金通用問題

正徳2年10月、幕府は将軍家宣の遺命という形で慶長金銀への回帰を宣言したが²⁷⁾ 同4年5月になって新金銀の吹替の惣触が出された²⁸⁾ 正徳改鑄の実施である。

この時幕府は、新貨が世間に出回るまで多くの時間を要するとして、旧貨の素材価値に応じた割合遣いや増歩を命じたが、金貨の場合その基準となったのは乾字金であった。乾字金は、新金と同品位かつ重量が半分であるため、乾字小判が新金2分、同一分金が新金2朱に相当し、乾字金の通用開始と同時に元禄二朱金の通用が停止されたこともあり、遣い勝手の良さから広く通用したのである²⁹⁾。

新金の引替は同年8月から江戸において開始されたが³⁰⁾、田原における新金銀および乾字金の使用状況を表したのが表1と表2である。

田原藩では、同年5月25日に正徳改鑄の触書が江戸から到来し、翌26日に郡奉行が田原町庄屋・年寄・組頭へその写しを渡しているが³¹⁾、両表を見てもわかるように、10月25日に行われた米の一番払い入札では西尾の権六郎が米805俵分を「新金」500両で落札し、11月1日に京都返済金400両を「新貳百両」で町便によって送り、享保2年4月20日に足軽小頭組の者を遣って江戸へ送った141両2分のうち、昨年の貸付麦金58両2分が「新小判」であった。その一方で、正徳5年11月2日に行われた粳米400両分と糯米200両分の入札では吉田町の甚助が「乾字金」で落札している。

新金が通用する一方で乾字金が通用していたのであり、この状況を鑑みた幕府は、正徳4年8月以降何度も新金の通用を督促しているが³²⁾、同5年4月の触書では、「新金いま諸国ゆき渡らす、其上只今迄遣ひ馴候ゆへに、多分ハ小形金を以通用之由」と、「小形金」、すなわち乾字金の通用が問題とされたのであった³³⁾。

享保元年(1716)8月、徳川吉宗が将軍に就任したが、貨幣政策は前代の良貨政策を継承し、貨幣の整理を進めた。すなわち、翌年8月、「新金出来に随ひ乾字金も段々引替候付、世上に相残候員数追日減少候」ため、乾字金の通用を3年限りとし、同5年からの通用停止を命じた³⁴⁾。ただし、「乾字金通用年数終り、停止之後に至ても、或遠国末々にていま引替相残り候も有之候ハ、引替所にて新金ニ引替可申事」と、通用停止後における新金との引替は許可し

表1 田原における新金銀の使用状況

年	月日	金 額	用 途	典 拠
正徳5	10.25	新金500両	米の一番払い入札における西尾権六郎落札代金(805俵分)	59
	11.1	新200両	京都借用返済金400両(町便金)	59
享保2	4.20	新小判58両2分	享保元年貸付麦代金のうち江戸差下分	108
4	6.23	新金200匁	松本寺への雨乞い祈禱料	153
	7.4	新金1両	霊岩(巖)寺への施餓鬼料	153
		新金300匁	城宝寺への水向料	153
	8.7	新金3分	海蔵院様(三宅康勝)33回忌の香典(藩主三宅康雄分)	154~155
		新金200匁	同上(藩主嫡男三宅康利分)	154~155
		新金100匁	同上(「御部屋様」分)	154~155
		新金100匁	法事担当の尾張久昌寺自白へ	154~155
	10.8	新金11両2分と銀1匁8分5厘	朝鮮人来朝につき魚類・鹿足代金の合計	144
		9両と銀1匁9分5厘	同上魚類代金内訳(銀高541匁8分5厘,60匁替,新金のみ)	同上
		2両2分	同上鹿足代金内訳(30本分→銀高1本につき5匁宛=計150匁)	同上
	10.19	新金50両	八王子村徳三郎上納の払米(50俵分)代金→10/20新金40両持参	145
	11.8	新金100匁	伊勢檜垣神主への目録金	159
	11.26	新100両	京都借用返済金	147
	12.12	新金建て	御蔵米・麦相場	148, 160
	12.23	新10両11匁	京都土山喜左衛門への呉服代金132両1分5匁5厘のうち	149~150
	12.25	新金建て	船運上	150
5	2.23	新金151両	稚海藻代金	163
		新金2分銭200文	串蛸代金	163
	6.5	新金5両	江戸御部屋臨時御用金(町便金)	166
	7.28	新金52両	江戸表御用金(町便金)	170
	12.10	新金300両	同上	176
6	4.12	新金18両3分銭467文	【野田村】朝鮮通信使道中人馬高掛金	302

〔注〕

- (1) 『田原藩日記』2(田原町・田原町教育委員会, 1987年)から使用貨幣が判明するものを抽出して作成。典拠欄の数字は頁数を表す。
- (2) 表中用途欄に【野田村】とあるのは野田村の事例で、典拠欄の数字は金田温『萬留書(弐)』(私家版, 1989年)の頁数。

表2 田原における乾字金の使用状況

年	月日	金 額	用 途	典 拠
正徳5	11. 2	乾字金600両	粳米・糯米入札。吉田町甚助落札	59
享保4	4. 7	乾200両	挙母より調達の米320俵分の代金	128
	6. 2	乾200疋	代官勘定につき手代4人への被下金	132
	6. 4	乾金1分	山廻への被下金	152, 154
	7. 14	乾金100両	岡崎にて才覚の借用金	136
	8. 7	乾金100疋	海巖院様（初代藩主三宅康勝）33回忌の香典（江戸・田原年寄，御用人分）	154～155
		乾金100疋	同上（江戸・田原妃年寄，御用人分）	154～155
	8. 17	乾200両	吉田・田原町人への早稲米払い代金	141
	8. 19	乾120両	吉田町人への早稲米払い代金	141
	8. 21	乾1両2分	寺社方御朱印代金	142
	8. 23	乾金30両	江戸上下屋敷雑用金御用金（町便金）	142, 157
	8. 25	乾金200両	京都借用利金返済（←8/17, 19 吉田・田原町人への早稲米払い代金）	142
	8. 26	乾200両	吉田町人への新米払い代金→8/27 江戸雑用・石代（高役）金（町便金）にあてる	142, 157
	10. 10	乾10両	「御部屋様」臨月につき江戸下屋敷御用金（町便金）～「今度大坂御才覚相調候へハ，為替金にて江戸請取ニ成候積」	144, 158
		乾21両1分	雪吹伝兵衛より江戸庄源五郎への差下金	144
	10. 12	乾金1両銭83文	道中差引残金	144
	10. 17	乾字金建て	銭相場	144～145
	11. 6	乾金60両	江戸町便金	159
	11. 14	乾金41両	新田金	146
		乾金1両2分	久美原村干鰯蔵修復代金	146
	11. 25	乾金253両	領内より上納の石代（高役）金→11/26 うち200両を京都返済へ	146～148
	11. 26	乾107両2分	7/14借用の岡崎借用返済金	146
	11. 28	乾字金建て	浜方鰯入札代金	146
	12. 9	乾金1,300両	大坂にて才覚の借用金（金配り書付）	147
	12. 10	乾字金建て	吉田米相場	148
	12. 12	乾金1分と銭50文	京都百足屋仁左衛門・祐程へ遣わすこのわた・蠟燭・壺代金	148
	12. 23	乾469両	江戸町便金（家中給金・上下屋敷雑用金）	149
		乾金290両四つ宝銀3分10匁	京都土山喜左衛門への呉服代金132両1分5匁5厘のうち	149～150
	12. 28	乾金981両2分と銭793文	山浜金	150
5	6. 11	乾金70両 + α	道中先荷御用金 + 足輕路用金	166
6	4. 25	乾字金1両2分	【野田村】田原十王堂修理のための勧進奉加金	307
	5. 4	乾金300疋	京都百足屋仁左衛門宿代（宿田原町六太夫）	206
	7. 6	乾字金1分	【野田村】田原十七谷観音御開帳花代	334～335
	8. 25	乾字金1分	【野田村】宝飯郡財賢寺本堂修理のための勧進奉加金	310
	9. 3	乾金1両銭300文	【野田村】松葉払い収入	347
17	12. 15	乾金400両	町五左衛門1歩通被下金	509

〔注〕

- (1) 『田原藩日記』2から使用貨幣が判明するものを抽出して作成。典拠欄の数字は頁数を表す。
- (2) 表中用途欄に【野田村】とあるのは野田村の事例で，典拠欄の数字は金田温『萬留書（弐）』の頁数。

ている。さらに翌年閏10月には、新金銀通用令が出された。ここでは、乾字金の通用が同4年限りであることを再確認するとともに、その引替期限を同7年までとした。そして、「乾字金にて何両と申取やり候得とも、当戌十一月より新金にて何両と申取やり仕候」と、11月から新金建てとするようにとも命じている³⁵⁾。ここにおいて、初めて乾字金の引替期限が設定されるとともに、基準貨幣が新金となったのである。

これらの幕府の政策を受け、田原藩では乾字金通用停止の触書を同2年8月27日に町・郷村へ伝達し³⁶⁾、新金銀通用令については不明であるが、同4年7月に出された乾字金の通用・引替の期限を再確認する触書については³⁷⁾9日に町・郷村へ写しを渡す一方で³⁸⁾、さまざまな対応を行っている。

まず、10月6日には、江戸廻船の運賃をはじめとする諸入用の才覚について話し合われたが、「例年之通月割利足、御立直段ニ乾金ニ弍俵安、来月へ入候ハ、無利ニ俵宛、極月朔日より新金ニ弍俵安之積」と、その際の利息を12月から新金建てとした³⁹⁾。そして、12月12日には、蔵米・麦相場を例年通り吉田相場を問い合わせた上で決定したが、吉田の手形米相場が乾字金建て、町相場が新金建てであったのに対し新金建てとした⁴⁰⁾。また、同6年4月にも、乾字金引替停止の旨を確認する触書が幕府から出されたが⁴¹⁾、これも郷村へ伝達し⁴²⁾、地方代官は停止以後乾字金による諸上納金を受理しないと⁴³⁾。さらに、同年12月15日には、次の書付を出している⁴⁴⁾。

来ル寅年限乾字金引替相済候、前々公義より御書出相触候通新金ニ乾金相交取やり候義正月より不仕之、無油断引替可申候、若極月切ニ引替残り所持候者有之候ハ、役所迄差出可申候、江戸江遣候而引替可相渡之旨書付出候、勿論来寅年中限候条、其旨相心得候様ニ書出申候

乾字金の引替が12月限りで停止されることを再確認するとともに、12月まで引替の残りを所持している者がいれば、藩の役所へ差し出し、藩がそれを江

戸へ送り引き替えた上で新金を渡すとしているのである。

このような幕府による新金銀通用令をはじめとする措置と、それを受けた田原藩の対応によって、引替停止を前年に控えた享保6年を境に一度は乾字金の通用が見られなくなるのであった（表2）。

ところで、正徳・享保と続いた幕府による良貨政策は、銭相場や物価問題を引き起こすことになった。

田原において「銭段々高直」と、山浜金の取り立ての際に銭相場の高騰が問題となったのは、改鑄の触書が領内に伝達され江戸での新金引替が開始されるより以前の正徳4年7月6日のことであったが⁴⁵⁾より問題となったのは享保4年10月17日のことである⁴⁶⁾。

一当町銭高直、其上払底之儀ニ候、依之申付候ハ、右之通ニてハ不自由之儀吉田相場不相応ニて候、伝馬申付候間、吉田ニて銭相調差支不申候様可仕候旨、町廻を以庄屋方へ申付候

この時の銭相場は、吉田相場が乾字金1分につき572文であったのに対し、田原町では548文であった。銭相場の高騰と銭の払底が問題となり、この状況では不自由で吉田相場は不相応であるとして、吉田で銭を調達することになったのである。

そして、正徳～享保と続いた良貨政策によって貨幣の流通量が減少した結果、「米価安の諸色高」、つまり米相場が下落したのにもかかわらず、他の物価が下がらないという問題が発生した⁴⁷⁾この状況に対し幕府は、享保15年正月に乾字金の通用を再開することになる⁴⁸⁾この触書は田原へ2月2日に到来し、家中・郷村へ伝達されているが⁴⁹⁾その後乾字金の使用が再び見られるようになるのであった（表2）。

2 元文改鑄と新金引替

(1) 元文改鑄の実施と高役金の上納問題

元文元年（1736）5月、幕府は元文改鑄を実施した。新金の品位は、享保金と比べ約21%引き下げられたが、「文」の刻印が打たれていたことから文金（文字金）と呼ばれた。新金の引替は、江戸では6月15日から開始され、古金と新金の割合は乾字金が200両に新金100両とされたのに対し、慶長金・享保金は無差別通用とされたが、金座から引替所に下す際に100両につき65両の増歩が加えられ、江戸・大坂町人の訴願により割合遣いが認められた。

こうして実施された改鑄の触書は、田原には同年5月23日に到来し、藩は町・郷村へも伝達した⁵⁰⁾。藩では、以後の貨幣政策に関する幕府の触書の全てを領内へ伝達しているが、改鑄実施後の田原における古金と新金の使用状況を表した表3を見てもわかるように、領内における新金の通用は進まず、藩はそれへの対応に追われることになった。

表3 田原における古金・文金の使用状況

年	月日	金 額	用 途	典 拠
元文元	10. 8	古金50両	高役金（町便金）	2-616
2	8. 8	古金44両 銭60文，文金3両1分	村々より上納の高役金→8/12江戸へ下す	2-35, 3-36
	10. 4	古金3両1分と銀?匁	岡崎滝山寺石灯笼洗磨1基分の代金	3-51~52
		文金200疋	同上につき蓮浄院への樽代	同上
		文金200疋	同上出精につき岡崎宿橋屋へ	同上
3	正. 3	古金130両	高松村請浜代	3-96~97
	正.20	文金500疋	京都百足屋仁左衛門婚姻につき樽代	3-100
		古金100疋	同上につき肴代	同上
	7.24	古金205両と銭807文	道中金	3-131
		文金200疋	同上骨折につき生田弥左衛門へ	3-89
	12.15	古金建て	御蔵米・麦相場	3-158
4	正.15	文金100疋	家中射行につき弓一番への褒美金	3-229
	正.23	古金300疋	萱生長庵が靈巖寺江湖中御用掛を務めたことへの目録金	3-165, 230
	正.24	古金500疋	京都土山友次郎初めて参上につき目録金	3-231
	2.15	古金2両1分	和地村方谷山代（願い）	3-171

元文 4	2. 17	古金 7 両	若見村山代 (願い)	3-172
	2. 24	古金 2 両	若見村山代	3-172～173
	3. 7	古金 3 両	和地村方谷山代願いに対する藩側の回答	3-174
	3. 12	古金 1 両 2 朱	下野田村大池以作料を知多郡家大工が落札した代金	3-175
	3. 15	古金10両	高松村不貲につき太神楽実施のための拝借金	3-175～176
	4. 8	古金120両 2 分	領内お救い拝借金 (除越戸村)	3-179
		文金 5 両	同上越戸村分	同上
	4. 9	古金100両	御馬村九右衛門才覚予定の金	3-179
	4. 16	古金182両	藩主三男権之助持参金。文金300両の代わり (町便金)	3-234
		古金100両	道中金	同上
		古金18両	誂金 (町便金)	同上
	5. 1	古金建て	赤羽根村池尻の干鰯落札代金	3-182
	5. 6	古金	両代官前廻米金取立	3-184
	5. 16	古金100疋	料理人左次右衛門が去冬より女中部屋で 1 人で勤めたことへの目録金	3-186
	5. 25	古金	道中用心金を吉田で文金141両 1 歩に引き替え	3-187
	6. 22	文金 1 両 2 分	異国船警固のため赤羽根村番小屋へ差し置く遠眼鏡代金 (名古屋で調達)	3-191
	7. 3	古金建て	御蔵麦代金	3-194
	7. 13	文金100疋	雨乞祈禱を行った松本寺への礼金	3-197
	7. 14	古金59両 1 分 (山方), 112 両 3 分と銭777文 (浜方), 古金78両と銭226文 (赤羽根村分), 古金 6 両 2 分と銭928文 (舟運上)	盆前山浜上納金	3-197
	7. 21	文金建て	扶持方米を少々調えた際の米相場 (加賀・拳母・大垣米)	3-198
	9. 28	文金 8 両 2 分と銭200文	郷村・寺社から差し出した大坂四天王寺勸化金	3-214
	11. 2	文金100両	江戸表雑用金 (町便金)	3-220
	11. 5	文金173両 1 分余	御馬村拝借金返金	2-321
	12. 15	文金200両	江戸表雑用金 (町便金)	3-226, 240
		古金100両	若殿様入用金 (町便金)	同上
	12. 18	文金建て	御蔵米・麦相場	3-227, 240
	12. 26	文金 1 分ずつ	田原町林吉・善兵衛・半右衛門への被下金	3-227
5	2. 21	古金50両, 文金25両	若殿様入用金文金100両の代わり (町便金)	3-243
	3. 18	古金135両, 文金20両	江戸表給金・雑用金 (町便金)	3-244
寛保元	5. 17	古金200両 (うち 8 両は「武州金」)	道中金。御馬村九右衛門才覚→尾張で引替	3-290～291
延享 3	8. 15	古金100両	江戸への町便金	4-80
宝暦 5	8. 23	古金100両, 文金50両	藩主三宅康高隠居願い入用金 (町便金)	5-239, 261

〔注〕『田原藩日記』3～5 から使用貨幣が判明するものを抽出して作成。典拠欄の数字は巻数・頁数を表す。

その中でも特に問題となったのが高役金（国役金）の上納であった。高役金は、江戸へ送金し、新金で幕府に上納する必要があったため、藩ではそれへの対応に苦心したのである。

改鑄が実施された年の10月8日には高役金として古金50両を江戸へ送っているが（表3）、翌年6月26日の高役勘定の際に問題が発生している⁵¹⁾

一廿六日、今年ハ高役勘定致候ニ付（中略）、今日も昨日之通会所へ寄合候而新金之（つ脱カ）もり割付致候、併此節迄爰元新金未押渡り不申、其上錢相場迄耽と相定り候事も無之、又々今年とても去年之通之心ニて候故、御相談を以相定可申と先新金之割計致置候

いまだ領内に新金が通用しておらず、錢相場も定まっていなかったため、古金で上納した前年までと同じ様子であった。古金上納の場合や錢相場については後日相談して決定することにし、まずは新金上納の場合のみの割付を行ったのである。そして、7月11日になるとその相談が行われている⁵²⁾

一高役金江戸ニ而御取替被下候ハ、郷村御救御座候、八月十日と申候而ハ何ニても無之時節ニ御座候、九月ニも成候ハ、少々小豆ニても出来候歟、色々御相談申候へ共難儀候、近々文金ニ御取立可申付候

高役金を江戸で引き替えれば郷村のお救いになるということや、上納の期限が8月10日では金のない時節であるため、小豆のできる9月にしてはどうかということなどが相談されたが難航し、結局は新金で取り立てることを決定したのであった。

その後、上納期限の8月5日になったが、用意できなかった郷村が町庄屋の取次で上納の延期を願い、藩もこれを許可した⁵³⁾。実際、8日になると、「是よりハ新金之割ニいたし錢五貫文割之積り相触候処、村々新金無之ニ付、古金差

出し候故、町庄屋方にて六割減り之積り帳面仕立取立候」と、新金がなかったため新金3両1分と錢60文のほかに古金44両を差し出し、町庄屋が新金の場合の6割減のつもりで帳面を作成して取り立てたのであった。⁵⁴⁾

こうして上納された高役金を、翌12日に江戸へ差し下すため、11日に「高役金上納之覚」が作成されたが、そこから本田・新田分と寺社分の高役金74両3分と銀4匁6分9厘の代金として古金44両3分と新金3両1分が差し下されたことがわかる。⁵⁵⁾ また、そこには「新金引替之儀難相決候ニ付、大概之積を以取立之、右之通差下シ申候、其元にて御引替被成、御上納被成可被下候」と、新金との引替方法については決定できなかったため、おおよそのつもりで取り立てて差し下したので、江戸で引き替え幕府へ上納するようにともあった。

さらに、この覚書の添状には、「上納相済候ハ、引替之訳仰可被下候」と、幕府への上納が済み次第引替の様子を伝えるようにとの指示もあったが、28日にそれへの返答があった。⁵⁶⁾

一今日之便、江戸左衛門・吉左衛門兩人より高役金遣し候ニ付、添状之返事来候、此間ハ文金脇替高直ニ成、一兩日聞合候処、百六十三兩貳分にて引替候由、尤引替所にてハ当年中ハ御定之割合ニ御座候得共、急成間ニ合かね候間近所にて引替候由、上納相済候ハ、^(勘力)勤定致、可被申越之由申来候

新金の脇替が高値となったため一兩日問い合わせたところ、古金100両につき163両2分で引き替えられているという。引替所で引き替えれば幕府が定めた165両の割合で引き替えられるが、急なことであるため間に合わず近所で引き替え、上納が済んだら勘定し申し越すとしている。田原では依然として古金が通用し江戸で新金に引き替えようとしたのにもかかわらず、江戸では新金が強くなっており、幕府が設置した引替所では急な引替ができなかったため、引

替に苦心している様子がうかがえる。

高役金は、10月9日に残金古金3分と錢950文の郷村への返却方法が決定することで完済となったが⁵⁷⁾、新金が領内に行き渡らなかった結果、このように高役金の上納をめぐりさまざまな問題が発生したのであった。

(2) 新金引替停止後の状況

元文3年4月限りで割合遣いは停止され、同年11月末になると引替所が廃止された。さらに、翌年3月末には新金の吹替も終了したが、それ以降も割合遣いは続いていたようで、早くも8月には、「今以遠国は勿論、江戸・京・大坂二ても割合遣致し候もの有之由相聞候、向後古金銀割合通用堅致間敷候」と、遠国はもちろん、江戸・京都・大坂三都でも割合遣いが行われているので、今後は堅く禁止する旨の触書が出された⁵⁸⁾。

この触書は田原へも28日に到来しているが、郡奉行は、「弥此上世間共ニ急度御触之通相守被成候而ハ余程之御違イ有之事、氣之毒之段御物語申候、併此御触在之候而も中々割合は相止ミ申間敷様子ニて候」と、触書の趣旨を守ると世間の状況とはかなりの違いがあり気の毒であると語っている⁵⁹⁾。また、この触書が出されても割合遣いが止む様子がないともされているが、表3を見てもわかるように、田原ではこの段階に至っても依然として古金が通用しており、特に元文4年には藩財政の窮乏への対応と、参勤交代に伴う道中入用金（道中金）の引替などに追われていくことになった。

元文4年の藩財政は危機的状況を迎えていた。正月28日に盆前の入用金を見積もったところ、「七百両程も御借用不被成候而ハ御間ニ合不申」と、入用金1,800両のうち700両を借用しなければならない状況であったが⁶⁰⁾、従来の借用先である八王子村徳三郎からは金子払底のため断られ⁶¹⁾、新たな借用を模索していくことになった。

その結果、2月になると御馬村久右衛門からの借用が決まり、20日に久右衛門が200両を才覚してきた⁶²⁾。一方、久右衛門からの借用が高利であったた

め、そこからの借用を減らすために八王子村徳三郎をはじめとする他の金元へも再び依頼することになり、10日に田原町の孫六郎が彼らを訪ねた結果、200両の借用に成功した⁶³⁾

このように、領外の者から借用することで入用金の不足分を補いつつあったのであるが、4月8日になって久右衛門の息子与三郎が地方代官慶徳七郎右衛門方まできて次のように述べたことで事態は急変する⁶⁴⁾

来月ハ弐百両差上可申候、但百両ハ古金才覚仕候、文金百六十五両ニ而御請取可被遊候、跡之金両文金ニ而仕候哉、金元只今ニてハ落着不申候旨、模合故只今伺不申候而ハ集メ兼候、大金之儀、右両様御定可被仰聞候と申候処、元メ・御蔵方ニても難相^(決)沢儀、道中ニても古金御通用之处、近キ頃ハ古金好候由登候者申候、然バ当分定候而難申候、来月ニ入可申渡と被申候ヘバ、左様ニ而ハ調申間敷ト七郎右衛門被申候、左候ハゞ借申間敷候旨挨拶、清六郎御年寄衆へ百両は才覚心当有之候、残百両御才覚被下間敷哉と志右衛門殿へも御相談被申候、無左候而は町ニ而百計ハ調可申事と何も申候

来月 200 両才覚するが、そのうち 100 両が古金であるため新金換算で 165 両のつもりで請け取ってほしい。残りの 100 両は新金で才覚するかどうかを決めてほしいと与三郎が言ってきたのである。これに対し藩の元締と御蔵方は、道中筋では古金が通用し、近頃は古金の方が好まれているという情報を得ていたことから決めることができず、来月になってからどちらにするか申し渡すとした。しかし、久右衛門は模合によって才覚していたため、今決めてもらわないと調えることができないとし、久右衛門からの借用を断念することになったのである。結局元締秋野清六郎の心当たりから 100 両を才覚し、残りの 100 両については在府年寄平山志右衛門と相談した結果⁶⁵⁾、心当たりがなければ田原町で調えることになった。古金と新金が併用され続けていた影響が、入用金の才

覚という藩財政の問題にも及んだのである。

こうして紆余曲折を経ながら入用金の不足分を才覚していったのであるが、4月16日には、「今日江戸江町便差立、権之助様御持参金文金三百両之代り古金百八十弍両、外ニ古金百両御道中金、是ハ文金ニ而引替差登候積り」と、藩主次男権之助（貞高）が西丸小姓番頭松平備後守信綿へ養子縁組する際の持参金として、新金300両の代わりに古金182両を町便金で江戸へ送り、道中金の古金100両については新金に引き替えた上で送ることになった⁶⁶⁾。

この道中金の引替について、藩は尾張・吉田・江戸の相場情報をもとに実施している⁶⁷⁾。

一此間文金増歩、尾州・吉田辺も三割より四割位迄之歩合（中略）、当所は勿論之儀ニ候、江戸ハ文金引替六割余之風聞有之ニ付、御道中金百両江戸へ引替ニ被遣之

5月6日に、引替の際の歩合が尾張と吉田、田原辺りでは3、4割であったのに対し、江戸では6割であるという風聞を聞いたため江戸へ引替に遣わしたのである。ところが、実際に江戸へ引替に遣わしてみると状況は異なっていた⁶⁸⁾。「江戸表も存之外近キ頃文金景気強、依之江戸ニても只今迄見合有之处、昨日吉田清須屋方へ江戸より御金参候左右有之候」と、江戸でも新金の景気が強かったため見合わせとなり、5月18日になってようやく吉田宿本陣の清須屋までやってきた。そして、「江戸より引替来り候文金、初メ之百両分百四十弍両弍分、跡百両ハ百四拾両之相場之由、此節尾州之沙汰五十両迄之由先達而相知レ不申、御損立チ残念至極之旨御物語申候」と、6日に引替に遣わせた方の相場は古金100両に対し新金141両、その後遣わした方は140両であったが、尾張相場が150両までであったということを知らず、損となり残念至極であったと語ったのである。藩の古金引替の実態がわかるのみならず、江戸と地方（尾張・吉田・田原）における新金の通用度合いに差があったことがうかが

える興味深い事例である。

ところで、古金通用継続の影響は郷村から藩への諸上納金にも及んでいる。

元文4年5月6日、両代官から廻米金の取立についての報告があった。⁶⁹⁾

一両御代官衆前廻米金取立之儀、相談之上古金にて取立申候、尤在々より
文金も持参、割合之儀いかゞと相尋候村も在之由、文金にて候得ば去暮
之格六割半にて候段申聞候故、何も何も古金にて致上納候旨両代官衆被
申候

相談の上廻米金を古金で取り立てることにしたが、新金を持参し古金との割合を尋ねてくる村もあった。これに対し6割半という去年暮れの割合を申し聞かせたところ、いずれも古金で上納したという。

7月3日になると、売付麦の石代相場である敷麦相場を建てるために吉田の相場書付を取り寄せ相談したが、「文金にてハ諸取立ニ相障候ニ付、古金にて立ル」と、新金で相場を建てるに支障があるため、古金で建てている。⁷⁰⁾

そして、11月23日には、郷村から石代金上納に関する次の願いが出された。⁷¹⁾

一高松・赤羽根・若見、今年より石代金之儀、文金を以壺両ハ壺両にて定
之金高上納仕度旨、文左衛門迄相願候由、此間中相談相極、追々申触候
通、古金通用一向ニ相止ミ候ハゞ格別、いまだ割合通用之事候(中略)、
第一割合遣ひ有之内ハ願難相立段申聞遣し候段文左衛門被申聞候、向イ
郷庄屋共も此間町割場迄罷出、右之願致度段異見承候処、町庄屋ハ不同
心故何も尤ニ存願相止メ候由

高松・赤羽根・若見の3か村が、今年から新金で1両なら1両と無差別で上納したいと山浜代官近藤文左衛門まで願い出たのである。これに対し近藤は、

古金通用が止むのであるならば格別であるが、いまだに割合遣いが行われている状況では聞き届けることはできないと答えた。「向イ郷庄屋共」も田原町の割場まで来て3か村と同様に願い出たが、町庄屋は同心せず、それに同意した庄屋たちは願いを取りやめたという。この段階において、郷村には新金が出回りはじめていたのにもかかわらず、依然として割合遣いが続いていたことに対する混乱が見られるのである。

さらに、12月15日には、蔵米・麦相場を建てることになったが、ここでも問題が発生している。⁷²⁾例年通り吉田相場を問い合わせた上で建てようとしたが、「使帰候時分米値段上り申由町触候由、景気強候旨、依之重而値段立候事御相談十八日之筈相延候」と、吉田から使者が帰ろうとした頃に米相場が上がり景気が強くなったので、18日に延期となった。新金と古金の取り扱いについても相談し、「米値段文金ニ而立、古金取候節百五十三両と申候由、百五十両二定可然哉元方被申候、御蔵方ハ百五十三両能候半歟と被申、決不申候」と、吉田では米相場が新金で建ち、古金で上納の場合新金100両につき古金153両の相場で取り立てていたのに対し、元方は150両、御蔵方は153両と主張し意見が分かれ決まらなかったのである。

以上見てきたように、割合遣いと引替の停止以後も領内では古金の通用が続き、藩もそれへの対応に追われたが、元文6年になるとその事例が2件に減少し、寛保元年（1741）5月の道中金引替を最後に一旦はその事例は消える（表3）。ところが、延享元年（1744）6月に幕府が割合遣いを再開すると、同3年8月15日に古金100両が江戸へ町便金で送られ、宝暦5年（1755）8月23日には藩主三宅康高の隠居入用金として新金50両のほかに古金100両を町便で江戸へ送っているように（同表）、古金の使用が見られるようになるのである。

3 田原藩領主経済と幕府新貨引替策

貨幣原資（吹元）である金・銀・銅の産出量は、既に元禄期にはピークを過

ぎており、幕府は古金を吹き替えることで新金を発行しなければならなかった。そのため、幕府は新古金の引替を迅速に行う必要があったのであるが、今まで見てきたようにそれは達成されず、何度も引替の督促を行わなければならなかった。

ここでは、田原藩領主経済や地域経済から田原における日常的な貨幣の獲得方法を明らかにするとともに、幕府の新貨引替策について検討することからその要因を探ってみたい。

田原藩は、年貢として収納した米・大豆・大豆葉・炭・松薪などを江戸へ回漕し、その余剰米や松葉・干鰯・田作鰯・盆鯖などを領内や尾張・三河商人へ売却することで換金していたが⁷³⁾、1万2,000石の譜代小藩であったため、その規模は大藩に比べ小さかった⁷⁴⁾。領内の特産物は少なく、藩は貞享2年(1685)3月に漆、元文2年6月に櫨の栽培を計画するが⁷⁵⁾、いずれも失敗している。

藩財政は、平作時にкаろうじて収支のバランスが取れていた状態で、既に寛文期に領内へ御用金を賦課した事例が見られるが、領内への御用金は天和期になると不可能となり、京都や伊勢湾・三河湾内の諸地域から借用を行うようになった⁷⁶⁾。

領内に目を転じてみると、領内で「店」の存在が確認できるのは田原町と高松・赤羽根両村のみである。田原町には名古屋商人と交流のある六太夫のような町人が存在し、太平洋側の「片浜十三里」と呼ばれた高松・赤羽根両村などの漁村では魚荷を通じ吉田商人との関係を有していたが⁷⁷⁾、三都商人と直接取引するような商人は存在しなかった。多くの郷村では、年貢皆済後の米や松葉などを田原町や伊勢湾・三河湾岸内の諸地域へ売却していたが、取引規模は小さかった⁷⁸⁾。

以上が田原における日常的な貨幣の獲得方法であるが、これに対する幕府の新貨引替策を見てみると⁷⁹⁾、元禄金は、元禄8年から同11年末まで江戸本郷の金座の金吹所に併置された引替所で御為替十人組・三井組が引替を担当し、同12年からは金座で直接引き替えられた⁸⁰⁾。

元禄金の引替に対する幕府の方針は、同9年9月に出された「書付」「口上覚」「金銀引替之覚」からうかがうことができる⁸¹⁾。幕府の大目付から藩の江戸留守居に渡された「書付」では、いまだに国元・在所で引替が行われていないと聞くので、早速引き替えるよう指示するとともに、「誰々引替之儀無之由名茂相知レ可申候、荻原彦次郎(重秀)方へ留守居候面々罷越様子承可申候」と、後日誰が引き替えていないのか勘定奉行荻原重秀へ様子を知らせるようにとしている。これを受けて留守居が、荻原へ問い合わせた際に聞いたのが「口上覚」であった。

一 口上覚

一新金銀ヲ古金銀ニ引替之儀、武家方より金銀吹所ニ直に引替候而ハ不案内ニも可有之候間、両替屋方へ役人衆被申合引替可然候、在々之金銀ハ、其所ニ取次申町人か百姓相定置、江戸両替屋と申合候ハ、滞申間鋪哉ニ候、且又道中海陸共金銀運候儀、町人等之申合計ニては無覚束候者、其領主役人衆より申付様も可有之候、金銀引替候ニ付、金は千両ニ付十両、銀は百貫目ニ付壹貫五百め宛増相渡し候間、此増金銀之内ヲ以、在々金銀取集候入用・道中持運賃並ニ両替屋之取次候入用等ニ成申候間、ケ様之儀両替屋江役人衆被相尋候ハ、様子具ニ相知滞申間敷候、急ニ金銀大分取集、一度・二度ニ引替申ニては無之候、右之通手筋相極候得ハ、段々安キ員数程宛引替可然候、此書付は申違為無之如此候、以上

(元禄九年)
子 九月

まず、武家方については、直接吹所(引替所)で引き替えるのは不案内であろうから、両替屋と役人衆が申し合い引き替えるようにとし、在方については、取次の町人・百姓を定め江戸の両替屋などと申し合えば滞ることはないとしている。また、金銀を運ぶのが町人のみで覚束ない場合は、領主より申し付けるようにともある。そして、この「口上覚」に対応する江戸の両替屋の名前が書き上げられているのが「金銀引替之覚」であった。

つまり、元禄改鑄時の引替は、江戸のみに引替所が設置され、武家方は江戸の両替商－引替所（御為替両組）というラインで、在方は取次の町人・百姓－江戸の両替商－引替所ないしは町人・百姓－領主－江戸の両替商－引替所というラインで行われたのである。

一方、幕府の指示を受けた田原藩郡奉行は、田原町人に対し古金の取り集めや江戸での引替を指示したが、田原町人は江戸へ行く者は誰もいないので難しと答えた。先に述べたように、田原町人で江戸商人と取引がある者は存在しなかったものであり、ここに元禄改鑄時の引替の構造的問題を見ることができる⁸²⁾。

その後の正徳・享保改鑄時には各種の引替手段が用意された。当初は江戸・京都・大坂の三都に引替所が設置され引替が開始されたが⁸³⁾、引替が進まず、正徳5年4月になって江戸両替商・錢屋に組合を結成させ、その組合員数に応じ一定額の責任引替を命じるとともに⁸⁴⁾、それ以外の江戸商人にも組合を結成させ、各組合に入る古金銀を引き替えさせた⁸⁵⁾。

続く元文改鑄では、事前に古金銀の世上残高を調査した上で⁸⁶⁾、三都に引替所が設置され、御為替両組に引替御用が命じられたが⁸⁷⁾、江戸での引替が開始される前の元文元年5月16日に、改鑄御用掛の勘定奉行細田時以が御為替両組に対し、「近々に銀百貫目・金千両仲間へ御渡可被成間、国々へ早く差遣見せ可申、尤其仕方書出候様被仰付」と、「見覚金銀」を国々へ差し遣わし見せる仕法を諮問し、それに対し御為替両組は19日になるとそれについての書付を提出している⁸⁸⁾。

一今吹金、関東・北国・奥州筋へ遣申積相考申候処、奥筋・関東筋より諸色商・売物引請候問屋共方へ相渡、右問屋方より手寄の国々へ差遣候はゞ、早速奥筋迄相廻り可申と奉存候

一四国・中国・西国は不殘銀通用の国々にて御座候、五畿内・東海道は金銀取交通用仕候付、右御引替金銀京・大坂私共店々迄差登せ、関東筋の

致方を以、九州其外国々を引請候問屋共并御当地十問屋共へ相渡、所々へ差遣候様仕候はゞ、早速相廻り可申哉と奉存候、尤問屋とも方へ御定の増歩相渡申積御座候

関東・北国・奥州筋へは、諸色商・売物問屋へ渡し、それらの問屋から取引のある国々へ遣わせば、奥州筋まで速やかに見覚金銀が廻るとし、四国・中国・西国や五畿内・東海道については、関東筋と同様九州やそのほかの国々と取引のある大坂の問屋や江戸の十組問屋へ渡せば廻るとしている。

この書付を受けて、24日になると配分書付が御為替両組によって作成され、「見覚金銀」が「関東筋・東国筋・其外所々へ、随分少宛も金銀差遣候」ため江戸諸問屋に、「江戸の内へ随分金廻り候」ため御為替両組と両替仲間に、「海道筋・其外国々へ、随分右金銀配分行渡り候」ため米問屋に配られるとともに、「五畿内・西国・中国九州を限り行渡り候様に、京都・大坂私共店々へ為相登、右国々諸問屋へ相渡し申積り」で京都・大坂へ差し登されたのであった。⁸⁹⁾

このように、正徳・享保改鑄と元文改鑄時に幕府は、三都の引替所から諸問屋・米問屋・両替商を通じた引替を意図したのであった。つまり、幕府は、三都を中心とする商品流通網を利用して新貨を全国に浸透させようとしたのであるが、大藩に比べ三都との経済的結びつきが弱く、伊勢湾・三河湾内の諸地域でそれを介さない地域間取引も行われていた田原において新金の通用が進まず、藩がその引替に苦心したのはそのためであったのである。

お わ り に

元禄改鑄から元文改鑄に至る新貨引替の整備過程は、幕府が新貨を迅速に全国へ流通させる手段を獲得していった過程ということもできる。だが、元禄改鑄時に比べ格段に整備された元文改鑄時であっても、三都以外の地域へ新貨を直接供給しようとする姿勢は見られず、三都の中央市場を通じて新貨を流通さ

せようとするものであり、それとの結びつきが弱い田原のような地域では新貨の浸透が遅れたのであった。

このような意味において、宝暦期の新貨流通促進策は一つの画期をなす。本稿では、金遣いの田原を事例としたため銀貨の事例については検討できなかったが、宝暦4年10月に、延享元年6月の割合遣い再開後においても古銀を貯め置く者があり、「別て五畿内・北国・西国筋多分古銀有之由相聞候」と、特に五畿内・北国・西国筋に古銀が多くあると聞くので、「右国々銀座役人相廻り、五割増之積ヲ以買入候筈二候」とこれらの国々へ銀座役人を派遣し、「定法之代り銀」、すなわち文字銀（新銀）で古銀を買い入れさせたのである⁹⁰⁾。新銀の流通遅滞に対する措置であるとはいえ、三都以外の地域へも新貨の供給を試みたものとして評価できよう。

その後の新貨の引替は、より一層整備されていくとともに、三都以外への地域へも新貨を供給しようとする政策も見られるようになった。明和9年（＝安永元年、1772）発行の南鐐二朱判は、当初は江戸・大坂町人への無利息貸付によって流通の促進をはかったが、寛政期になると幕府代官を通じた西国・中国筋の農村への貸付が行われるとともに、生野銀山の山師や秋田藩・紀州藩家中へも貸し付けられた⁹¹⁾。

文政改鑄時には、江戸に多数の引替所が設置され、大坂では御為替両組による引替所に加え、十五軒組合が引替を開始したが、その成員には西国大名の館入を務める者が加わっており、西国諸藩の引替を期待したためであった⁹²⁾。さらに、引替所は、三都のみならず東海以東の幕府代官所にも設置されており、三都の引替所は文政～天保と貨幣改鑄が連続し引替期限が延長され続けることで常設状態となった。また、この体制下においても中国・九州筋における引替が進まなかったため、九州諸藩と取引関係にあった肥後国天草郡の石本平兵衛を勘定所御用達に任命し、引替に当たらせている⁹³⁾。

このように機会が格段に増えることで、以前の改鑄時に比べ新貨の引替が円滑に行われるようになったのである。

注

- 1) 拙稿「日本近世の貨幣流通に関する試論－黒田明伸著『貨幣システムの世界史』を手掛かりとして－」（『歴史の理論と教育』117, 2004年）では、近世貨幣流通史研究の現状をもとに貨幣流通についての試論を行った。拙稿発表後も、岩橋勝氏・浦長瀬隆氏・加藤慶一郎氏・古賀康士氏などによって、近世の貨幣流通についての事例分析が精力的に進められている。
- 2) 岩橋勝「小額貨幣と経済発展」（『社会経済史学』57-2, 1991年）7頁。
- 3) 伊東多三郎氏は、「幕府が貨幣経済の管理に必要な中央集権を遂げておらず、諸藩領はおろか京坂地方に対してさえ通貨情勢を操作する能力に不足することは明かである」「貨幣の発行流通の過程には、その重大性にもかかわらず、公権によって一貫せる制度が整備していない」と（同「江戸幕府元文の貨幣改鑄」『史林』38-3, 1955年, のち同『近世史の研究 第5冊 領国・鉱山・貨幣』吉川弘文館, 1984年, 399～400頁）, 山口和雄氏は、新旧貨引替の場が三都に限られ、地方へは藩による三都での産物販売や旧貨の引替を通じて新貨がもたらされるため、地方への幕府貨幣の普及がスムーズでないと指摘する（同「近世貨幣流通の諸問題」『茨城県史研究』51号, 1983年, のち同『流通の経営史－貨幣・金融と運輸・貿易－』日本経営史研究所, 1989年に収録, 4, 7頁）。両氏による指摘は、十分な実証分析を踏まえたものではないものの、研究の現状を鑑みた場合重要な問題提起であると言える。
- 4) 渡辺信夫「元禄の貨幣改鑄と領国貨幣の消滅」（豊田武教授還暦記念会編『日本近世史の地方的展開』吉川弘文館, 1973年, のち同『渡辺信夫歴史論集1 近世東北地域史の研究』清文堂, 2002年に収録）, 国安寛「土地証文等における代物の地域性とその変化－秋田藩享保改革案－」（『秋大史学』35, 1989年）。なお、拙稿「秋田藩大坂廻銭願いからみた幕府銭貨統制」（『出土銭貨』30, 2010年）では、このような問題意識をもとに元禄～元文期の秋田藩の事例を分析した。
- 5) 管見の限り、浦長瀬隆「近世関東地方における貨幣流通」（『神戸大学経済学研究年報』47, 2001年）が、関東地方を対象にした唯一の専論である。
- 6) 田原藩については、佐藤昌介「渡辺崋山と田原藩政」（『東北大学教養部文科紀要』10, 1962年, のち同『洋学史研究序説』岩波書店, 1964年に収録）, 田原町文化財調査会編『田原町史』中巻（田原町教育委員会, 1975年）などを参照。
- 7) 本稿で主に依拠する史料は、田原藩郡（村）奉行の公務日誌である「萬留帳（書）」や祐筆の「御祐筆（部屋）日記」である。これらの史料は、田原町・田原町文化財保護審議会編『田原藩日記』第1～10巻（田原町・田原町教育委員会, 1987～1997年, 以下、『日記』巻数・頁数と略す）として翻刻出版されている。
- 8) 高柳眞三・石井良助編『御触書寛保集成』（岩波書店, 1934年, 以下、『寛保集成』と略す）1757号, 892頁。
- 9) 三井高維校註『校註両替年代記』原編（岩波書店, 1932年）51頁。

- 10) 『日記』 1-390 頁。
- 11) 同上 415 頁。
- 12) 同上。後述する幕府の「書付」「口上覚」「金銀引替之覚」を受けての対応であると思われる。
- 13) (和田屋) 六太夫は、名古屋商人と日常的な交流があり、のちに名古屋商人で酒造業を営む田島屋と縁戚関係を結んだ(西田真樹「三河田原藩政に映じた尾張および尾張藩」『桜花学園大学研究紀要』 2, 2000 年, 29~30 頁)。
- 14) 『日記』 1-416 頁。
- 15) 同上 415~416 頁。
- 16) 『寛保集成』 1762 号, 893 頁。
- 17) 『日記』 1-420 頁。
- 18) 『寛保集成』 1772 号, 896 頁。
- 19) 同上 1778 号, 897 頁。藩でも 2 月 5 日にその旨を町へ伝えている(『日記』 1-614 頁)。
- 20) 『日記』 1-471 頁。
- 21) 藩は、通常毎年 12 月になると、近隣の吉田相場を問い合わせた上で米・麦の石代金相場などとともに銭相場を決定していた。
- 22) 『日記』 1-639 頁。
- 23) 不良貨幣問題とそれへの幕府の対応については、安国良一「貨幣の機能」(『岩波講座日本通史 12 近世 2』岩波書店, 1994 年) 160~166 頁が詳しい。
- 24) 『日記』 1-639 頁。
- 25) 同上 2-24 頁。
- 26) 『寛保集成』 1818 号, 920 頁, 『校註兩替年代記』原編, 77 頁。
- 27) 『寛保集成』 1797 号, 903~905 頁。
- 28) 同上 1800 号, 905~909 頁。
- 29) 『校註兩替年代記』原編, 114 頁。
- 30) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第 3 卷(塙書房, 1995 年) 4391 号, 285 頁。
- 31) 『日記』 2-25 頁。
- 32) 『寛保集成』 1802, 1805~1806, 1808 号, 910~916 頁。
- 33) 同上 1806 号⁽¹⁾, 911 頁。なお、元禄金の通用は、正徳 5 年 12 月に享保 2 年 12 月限りとされ(同 1807 号, 914~915 頁), その旨を伝えた触書は 18 日に田原に到来し郷村へ伝達している(『日記』 2-61 頁)。
- 34) 『寛保集成』 1809 号, 916 頁。
- 35) 同上 1811 号, 917~919 頁。
- 36) 『日記』 2-117 頁。
- 37) 『寛保集成』 1815 号, 919 頁。
- 38) 『日記』 2-136, 153 頁。

- 39) 同上 144 頁。
- 40) 同上 148, 160 頁。
- 41) 『寛保集成』1818 号, 920 頁。
- 42) 『日記』2-205 頁。
- 43) 金田温編著『萬留書(弐)』(私家版, 1989 年) 304~306 頁。
- 44) 『日記』2-225 頁。
- 45) 同上 27 頁。
- 46) 同上 144~145 頁。
- 47) 当該期における物価問題への幕府の対応と元文改鑄の実施, その後の貨幣政策については, 拙稿「元文の貨幣改鑄と『松平乗邑体制』の成立」(愛知学院大学大学院文学研究科『文研会紀要』13, 2002 年), 同「享保改革後期における貨幣・物価政策の展開—いわゆる『松平乗邑体制』の性格をめぐって—」(同 14, 2003 年), 同「享保末年における幕府米価政策と元文改鑄」(『日本歴史』738, 2009 年)を参照。
- 48) 『寛保集成』1829 号, 924 頁。
- 49) 『日記』2-453 頁。
- 50) 『日記』2-609 頁。
- 51) 『日記』3-28 頁。
- 52) 同上 30 頁。上納期限が合わないが史料に従っておく。
- 53) 同上 33 頁。
- 54) 同上 35 頁。
- 55) 同上 36 頁。
- 56) 同上 43 頁。
- 57) 同上 52 頁。「御賭方替セ」で返却する予定であったが, 「村々へ相返し候儀少々之儀割合届不申」ため, 来年初めの上納金へ差し加えることになった。
- 58) 『寛保集成』1947 号, 931 頁。
- 59) 『日記』3-140 頁。
- 60) 同上 167 頁。
- 61) 同上。八王子村は田原と同じ渥美半島内に位置する幕領村で, 徳三郎は藩の借用を取り次いだり, 御用金の賦課にも応じるなど領外の有力な御用達であった。
- 62) 同上 168~172 頁。御馬村は幕領村で, 東三河の城米を積み出す御津湊を有し栄えた村であった。(渡辺) 久右衛門は, その廻米を請け負った廻船問屋で, 今回の借用以降御用達商人となった。
- 63) 同上 171 頁。
- 64) 同上 179 頁。
- 65) 当時平山は, 藩財政の危機的状況に対応するため田原に滞在していた(同上 176~179 頁)。

- 66) 同上 234 頁。権之助の持参金については、正月 29 日に 3、4 月頃新金を送るようにという江戸からの指示があり、「爰元ニて御間合候ニ致候而も歩合少々高メニて可有御座候、江戸表ニて御引替被遊候」と、田原で引き替えると歩合が高めのため江戸で引き替えることが既に決定していた（同上 167 頁）。
- 67) 同上 184 頁。
- 68) 同上 187 頁。
- 69) 同上 184 頁。廻米金については不明な点が多いが、江戸への廻米費用を藩が郷村に負担させたものであろうか。
- 70) 同上 194 頁。
- 71) 同上 222 頁。なお、「向イ郷」が具体的にどの郷村を指すのかについては不明である。太平洋側に位置する 3 か村の向かい側（渥美湾（三河湾）側）の郷村という意味であろうか。
- 72) 同上 226～227 頁。実際、御蔵米・麦相場は、18 日に新金で建てられたが（同 227 頁）、古金を上納した際の割合については記事が見当たらず不明である。
- 73) 以下、特に断らない限り、田原藩領主経済と東三河地域における商品流通に関する記述は、『田原藩日記』の分析結果をもとにしたものであり、その詳細については別稿を予定している。
- 74) たとえば、廻米高は平作時で年間 2,000～3,000 俵程度であった。
- 75) 『日記』1-238, 3-184 頁。
- 76) なお、享保期になると京都からの借用が不可能となり、大坂での借用を模索しはじめる。
- 77) 田原藩領内の漁村の存在形態と藩による支配、魚荷の流通については、伊村吉秀『近世東三河の水産物流通』（岩田書院、2004 年）、西田真樹「幕藩権力の漁村支配－渥美半島太平洋岸漁業と漁村知行権－」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』5、2002 年）、同「田原藩漁村支配の諸相」（同 6、2003 年）を参照。
- 78) たとえば、享保 6 年 9 月 3 日に野田村が松葉を売却した時の代金は、乾字金 1 両と銭 300 文であった（表 2 参照）。
- 79) 新貨の引替については、山口和雄「貨幣改鑄と三井組」（『創価経営論集』8-1、1983 年、のち同注(3)書に収録）が詳しい。
- 80) 『校註両替年代記』原編、52 頁。
- 81) 『日記』1-415～416 頁。これらの存在は従来知られていなかった。
- 82) なお、宝永改鑄時の乾字金の引替は、当初は「町人手前より引替ニ成候間、武家方其外之金子勝手次第町人え相渡、引替可申事」と、元禄改鑄時の方針を引き継ぎ町人（両替商）を通じた引替が指示されたが（『寛保集成』1785 号、900 頁）、6 月になって金座で直接引き替えることも許された（同 1788 号、900 頁）。
- 83) 『寛保集成』1800 号(2)、907～908 頁。

- 84) 『校註兩替年代記』原編, 107~109頁。
- 85) 「万記録」(林玲子・谷本雅之編『白木屋文書 諸問屋記録』るぼわ書房, 2001年, 15頁), 林玲子「元禄-享保期における江戸問屋仲間の動態-三拾軒組諸色問屋を中心として-」(『社会経済史学』28-3, 1963年, のち同『近世の市場構造と流通』吉川弘文館, 2000年に収録)。
- 86) 「甲辰雜記 二」(大口勇次郎監修・針谷武志編『向山誠齋雜記 天保・弘化篇』第6巻, ゆまに書房, 2003年, 195~208頁)。元文元年4月に, 金座後藤庄三郎と銀座年寄が古金銀の世上残高を記した書付を提出している。
- 87) 『寛保集成』1834号(2), 926頁。
- 88) 「元文金銀引替一件控」(『東京市史稿 産業編』第14巻, 東京都, 675, 682~688頁), 「金銀引替御用日記」(同886~888頁)。以下, 御為替両組による見覚金銀配布については, これらの史料による。
- 89) なお, 大坂へ差し登せた分については, 6月9日に見覚金銀配布の経過を御為替両組が報告した「口上」に, 「此分摂州・泉州・西国・中国・四国・九州筋通路在之御蔵屋敷方の名代・蔵元の類并御当地両替屋・米屋仲間へ引替相渡, 右の者共より諸方へ差遣申仕方に仕度」とある。また, 幕府は, 7月に, 中山道・美濃路の諸宿に, 「文字金壱両・壱分判壱ツ・丁銀壱枚・小玉壱ツ」および請書帳1冊を宿次で廻し, 問屋に請印させ(埼玉県立浦和図書館文書館編『埼玉県史料集 第7集 中山道浦和大宮宿文書』埼玉県立浦和図書館, 1975年, 31~32頁), 9月に, 東海道・中山道・日光道中・甲州道中に対し新金銀の通用促進を命じた触書に, 「先達て道中宿々にて, 此度吹改候文字金銀通用無滞ため, 見セ金差添, 通用可致旨相触候」とあるように(『寛保集成』1836号, 927頁), 道中筋にも「見セ金」を廻している。
- 90) 『宝暦集成』1307号, 433頁。
- 91) 竹内誠「幕藩体制と貨幣流通-南鐐二朱判の流通政策をめぐって-」(『歴史教育』11-11, 1963年, のち同『寛政改革の研究』吉川弘文館, 2009年に収録)。
- 92) 安国良一「文政改鑄と十五軒組合の成立」(『日本史研究』249, 1983年), 同注(23)論文, 169頁。
- 93) 吉田道也「石本家略史」(『九州文化史研究所研究紀要』3・4, 1953年)104頁, 藤本隆士「『金銀銭札記録』に見える銭貨について(2)」(『福岡大学総合研究所報』105, 1988年)68~69頁。